

文學博士 矢野仁一 著

現代支那概論 — 動かざる支那

東京 目黒書店發行

現代支那概論——動かざる支那

序

支那問題の複雑性は世界歴史の潮湧の如く押寄せる大勢の力と、數千年來積疊せる歴史的傳統の力とが同時に支那に働きつつあるが爲めである。現代支那を論ずるもの、或は其の既に昔日の支那に非ることを説き、或は其の舊態依然たることを説き、一見實に人をして歸趨に迷はしむるものがある。私は其の昔日の支那に非ずと説くものも、其の舊態依然たるを説くものも、共に支那問題の一面の眞を得るものにして、其の變動的、發展的、時局的の部分に就いて之を觀れば、實に昔日の支那に非るも、其の本質的部分に

序

序

就いて之を觀れば、舊態依然たるを失はざることを信ずるものである。本書は主として支那問題の本質的なものに就いて論じたるものにして、主として其の變動的、發展的、時局的なるものに就いて論じたる本書の姉妹篇「現代支那概論・動く支那」とは正に對蹠的なものである。本書中の治外法權に關する論文は顧維鈞君のコーランビア大學に提出したる學位論文「支那における外國人の地位」を論評したるものであつて、私としては多少の苦心を費したるつもりである。支那問題の中心に觸れるところも少なからず。切に江湖の一讀を望んで止まざるところである。

昭和十一年三月

著者

現代支那概論——動かざる支那

目次

支那の社會の固定性……………	一
支那の歴史における近代と古代……………	三
支那の共和政治と帝政の遺産……………	四
支那の帝政時代と共和政治時代……………	六
支那における外國人の治外法權……………	一四
支那における治外法權の起源と其の撤廢の問題……………	二〇
王道政治の理論と實現……………	二三

目次終

冀東政府は宜しく王道政治の實驗場たるべし	三三
支那の眞の統一と日本の對支那外交	三四
支那内亂の慘禍と國民革命の成否	三五
三民主義と露西亞の支那援助	三八

支那の社會の固定性

支那の社會は大體において士と庶民とに分かれてをる。これは昔から今日まで餘り變りがない。士は知識階級であり、同時に治者階級である。或は知識階級であるが故に治者階級であつたといつた方が適當かも知れない。政治を遊戲とし或は政治を職業とする階級である。庶民は之に反して無識階級であり同時に被治者階級である。無識階級なるが故に被治者階級であつたといつた方がよいやうな階級で、農、工、商を業とし、政治には毫も關係せず、また毫も政治に對して興味を持たないものである。さうして支那の人民の大多數は庶民であつて、士の階級に屬するものは、之に比較すれば極めて少數に過ぎない。

支那を一の社會として觀察すれば、政治に關係なく政治に興味を有せざる大多數の人民は社會の内部中心を構成し、政治を遊戲とし或は政治を職業としてをる少數の士紳或は政客は、其の極めて表面の部分において活躍してをると考へることが出来る。猶ほこの表面の一部分或は一隅において政治に反抗する不良の匪民が跳梁してをると考へれば、一層よく支那の社會の真相を盡すことが出来るやうに考へられる。この不良の匪民は政治が善いとか、政治の力が強いとかいふ場合には引込み、政治が悪いとか、政治の力が弱いかいふ場合には出て來るといふ不平分子である。支那の歴史はこの社會の表面の部分において政治を遊戲とし或は政治を職業とする分子間の政權爭奪の歴史、或はこの分子と之に反抗する分子との政權爭奪の歴史である。支那の社會の内部は其の表面と接觸する部分において多少の動搖影響を免かれざるも、實質においては殆んど影響を被ぶらないといつてもよいのである。それ故若し圖を以て支那の社會を示せば、内部と

表面との分界線は波線を以てすべく、表面において政治を遊戲とし或は政治を職業とする部分と、之に反抗する部分との分界線は、政治の善惡強弱に依つて移動することを表示する爲め實線を以てせずして虚線を以てすべきものであらう。實際においては政治に關係せず政治に興味を有せざるところの人民も、政治に従事し政治に興味を有してをるところの士紳或は讀書人、或は所謂政客も、政治に反抗する不良の匪民も、到る處に住雜居してをるのであるから、表面此の如く截然たる分界が認めらるゝわけではないけれども、深く支那の社會を省察すると、かういふ分界があり、またかういふ分界があるものとして考へると、支那の社會はよく分かるやうに考へられる。

二

支那の大多數の人民は政治は善いから之に依頼するとか、政治が悪いから之から離れるといふのではなく、政治といふもの其のものを無用のものと考へてをるやうである。

臺灣の人民が日本の政治を不止費氣といつて、ひどく煩擾がつてをるといふことである。支那の人民の政治に對する考へをよく示すものである。彼等は政治に依つて自分達の利益を保護してもらはふといふ考へがないから、政治は必要でない、租税を取らるゝだけ、必要でないよりは却つて悪いやうに考へ、成るべく之を逃避し之から遠ざからうといふ心持になつてをるやうである。政治を不必要と考へるといつても、無政府主義者のやうに、積極的に進んで政治を否認し、積極的手段に依り政治といふものを無くして仕舞はうと努力するのではない。さういふ積極的の考へ積極的努力は、單に自分の利益さへ保護さるればよいといふ極端の利己心のみで出来るものではない。社會全體の利益、人民全體の利益といふことを考へなければ出来ない筈である。然るに彼等は單に自分の利益さへ保護さるればよいのであるから、進んで積極的に政治を無くして仕舞はうなどゝは考へない。況してそんな努力はしない。少數の人民が政治を遊戲とし或は政

治を職業として、善い政治をなし、或は悪い政治をなし、または政權の爭奪をなしても、それはなすに任せて、自分はただ其の影響其の禍害を成るべく被ぶらないやうに、被ぶつても之を最小限度に止むるやうに、之から遠ざかり之から逃避せんとするのである。

政治が善いとか或は政治の力が強いとかいふ場合に引込み、政治が悪いとか或は政治の力が弱いとかいふ場合に出て來るといふ分子は、匪盜棍徒のやうなもので、若し政治といふものが無いやうになれば、匪を懲して良を安んずるといふことが出來なくなり、大多數の人民はかういふ分子の爲めに損害を被ぶり、劫掠の禍に罹らなければならぬやうにも考へらるゝが、彼等はそれは政治の害と餘り變りがないやうに考へてをるのである。彼等は政府の課税といふことも、匪盜の劫掠といふことも同様に考へ、政治がある爲めに之に對して租税を納むるは、土匪群盜あるが爲めに之に對して貢納金或は贖身銀を拂ふことゝ格別違ひがないやうに考へてをるのである。政府に對して租税を納むると

いふことは、政治を不必要と考へてをる人民に取つては、政治に依つて利益を保護してもらふ代りに、義務として納むるといふ意味ではなく、政治の掠奪を免かる爲め、或は政治の損害を少なくする爲め、換言すれば政治を避くる爲め慰撫の意味で之を拂ふに過ぎないのである。それ故政治が無ければ無いで、匪盜棍徒などの掠奪を免かる爲め、或は其の損害を少なくする爲め、之に貢納金或は贖身銀を拂へばよい、同じことであると考へてをるのである。

南宋時代に官の招撫を受け、歸順して官吏となつた福建の海賊鄭廣が其の前身が海賊であつた爲め、同僚の衆官は賤しんで交際しなかつたので、鄭廣有詩上衆官、文武看來總一般、衆官傲官却傲賊、鄭廣傲賊却傲官といふ詩を作つて衆官に示したといふことであるが、支那では官も賊も餘り變りがないのである。臺灣に汝去山我去官といふ諺があるといふことである。少なくとも人民から見れば官も賊も餘り變りがなく、官か

ら取らるゝ租税も賊から取らるゝ貢納金、贖身銀も性質において格別の差がないやうである。張作霖は滿州で馮麟閣などゝ並んで馬賊の頭目であつたことは知らぬ人もない程である。山東土匪軍の頭目であつた孫百萬は青島游緝軍の司令官となり、河南老洋人部下の土匪なども國軍十二營に改編せられ、老洋人、張得勝、李明盛などの頭目は國の字を授けられて、それぞれ張國信、張國威、李國治などゝ稱したことも近頃有名な話である。臨城事件の匪魁孫も旅長に任ぜられた。

三

支那人が平和的の人民である、平和を好む民族であるといふことはよくいはるゝ話で、西洋人の著書にもよくさういふことが述べてある。日本の學者などにも支那の民族性を論じた人も少なからずあるが、いづれも平和を好むといふ性質を其の一に擧げてゐない人はないのである。然るに支那には絶えず革命の騒亂が起つてをる。其の度び毎に

隨分慘酷な戰闘殺傷が行はれてをるのである。梁啓超は支那の二十四史は徹頭徹尾血肉狼藉の殺傷史であるといつてをる。平和を好む性質は支那の顯著な民族性の一であるといふ人は隨分この説明には困るのである。それでこれは支那の人民が戰爭を好む爲めではない、却つて平和を好む人民であるから、政治上の弊害に對しても、或る程度までは耐へてをる、他の人民ならば耐へられない程度までも耐へてをるが、弊害がよくよく甚だしくなり終に耐へられないやうになり、始めて已むを得ず革命の戰亂を起すに至るのであるといふやうに、説明にならぬやうな窮した説明を試みてをる人もあるのである。

然し清朝の中頃に起つた白蓮教徒とか、長髮賊の叛亂とかいふものは非常な騒亂で、一方は五省九年、一方は十六省十五年に互つてをるのであるが、白蓮教徒の叛亂は康熙、雍正、乾隆の仁政を受けた後に起り、長髮賊の叛亂は嘉慶、道光の後で、康熙、雍正、乾隆の仁政とは比較が出来ぬとしても、そんなに酷い堪へられない程の惡政虐政などはな

かつた時に起つてをるのである。支那の人民は平和を好む性質であるが、惡政が耐へられないやうになつて、始めて已むを得ず革命の戰亂を起したといふのでは説明が出来ないのである。清朝末の革命亂にしても、決して惡政が耐へられなくなつて起つた戰亂とは考へられないのである。然らば支那の人民の平和を好むといふ性質と支那に絶えず起つてをる戰亂、殺傷の事實とをいかにして矛盾なく説明することが出来るであらうか。

私はこれは革命の戰亂とか其の他の騷亂とかいふやうな事實は、支那の社會の表面において、政治を遊戲とし、若しくは政治を職業とする少數の人民、乃至政治に反抗し、政治が善いとか、政治の力が強いとかいふ場合には引込み、政治が惡いとか、政治の力が弱いかいふ場合に出て来る匪盜棍徒のやうなものとの間に起る事實であつて、大多數の人民の間には起るところの現象ではない、大多數の人民は成るべくさういふ戰亂、騷亂の影響を被ぶらないやうに、損害を受けないやうに、成るべく迅速に戰亂、騷亂を通

過せしめ、若しくは終息せしむる爲めに努力をなすに過ぎないと考へれば、説明が出来るやうに思ふのである。

支那の人民はただ自分だけさういふ戦亂、騒亂の影響を被ぶらないやうに、損害を受けないやうに、之を避けよう避けようとする爲め、敢て反對もしなければまた阻止もしない。反對するか阻止かすれば、戦亂、騒亂は其處に停止してそれだけ損害を受けなければならぬ、損害を受けることは嫌だから反對も阻止もしない。其の爲めに彼等自身は損害を免かることは出来ようが、戦亂、騒亂は容易に大きくなる。容易に平和は攪亂され、大局騷亂の形勢を馴致するに至るのである。私は支那程容易に平和の攪亂さるゝ國はなく、また支那程容易に平和の恢復する國もないと思ふのである。容易に平和が恢復するといふことは、また容易に平和の攪亂され、眞の平和の恢復せざる所以であるかも知れないが、兎も角直ぐちよゝとは落着くやうになるのである。平和は攪亂されたま

まに落着き、混亂狀態のまゝに靜止狀態となるやうな形勢になるのである。武昌で革命の戰亂が勃發したのは明治四十四年即ち宣統三年八月であるが、一個月経つか經たぬ中に、十餘省は獨立を宣言し、恰かも革命軍は十餘省を取つたやうな形勢になり、非常な大亂の狀態となつたのである。然しかういふ風に容易に十餘省は獨立を宣言した爲め、格別な騒亂はなくて済み、かういふ狀態のまゝに落着いたのであつて、大亂といへば大亂のまゝに固まつて、平和が一先づ恢復したやうなわけである。さうして翌年の二月には清朝の帝室が退位し、共和政府は形だけでも兎も角も出來て仕舞つて、もはや格別の戰亂はないやうになり、大亂狀態が終息したのである。亂るゝことも随分早い、治まるゝことも随分早いのである。

段祺瑞氏や王正廷氏などは、餘り早く革命戰亂が治まり、革命主義を徹底せしむることが出來なかつた爲めに、其の後も絶えず内亂が起り、混亂狀態は續くに至つたやうに

いつて、革命の戦亂は早く治めてはならなかつたのに、早く治めたのが悪かつたやうに考へてをるけれども、私は早く治めてはならなかつたのに早く治めたのではなく、早く治めなければならなかつたので早く治めたのであると考へるのである。早く治めなければ當時の共和軍は必ず強いといふわけでなく、必勝の形勢があつたわけではないから、時機を失して少しでも敗け色が立たうものならば、折角清に對して獨立を宣言した十餘省は、また革命軍に對して獨立を宣言するかも知れない。どっちでも形勢のよい方に轉じて、戦亂、騒亂の影響損害を成るべく受けないやうに成るべく迅速に之をして通過し經過し進行せしめて仕舞はうとするのが、支那の大多數の人民の考へであるから、民心の歸趨はどう變るかも知からない、早く有利の地歩を占めて時局を收拾しなければならぬ必要があつたから之を治めたので、其の外に途がなかつたのである。革命主義を徹底せしむるまで、革命の戦亂を早く治めないやうなことは出來べきことなどではなかつた。